

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2014年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	英米文学 専攻
研究代表者 (2015年3月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・英米文学専攻・博士課程後期課程3年	朝倉 さやか 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学部・教授	藤巻 明 印	
自然・人文・社会の別	人文	個人・共同の別	個人
研究課題	ロバート・フロストと「男らしさの欠如」		
研究組織 (2015年3月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・英米文学専攻・博士課程後期課程3年	朝倉 さやか	
研究期間	2014 年度		
研究経費	(支出金額)	194,886 円 / (採択金額)	200,000 円

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では Robert Frost の「男らしさ」の欠如に対する肯定的な姿勢を明らかにした。Katherine Kearns は Frost の作品の中に存在する女性性と男性性の葛藤を明らかにしているが、その葛藤はあくまでも詩人個人の内面的な葛藤として説明している。だが 19 世紀末から 20 世紀初頭という時代が女性の解放と同時に男性性の危機が叫ばれた時代であることを考慮し、男性性と女性性の葛藤を個人の内面だけでなく、個人と周囲の人々の間の葛藤、ひいてはジェンダー間の葛藤として考察した。特に第三詩集 *Mountain Interval* と第四詩集 *New Hampshire* を中心に精読し、Frost が男性性の欠如や女性の社会進出を恐怖する一方で、同時にその状態を肯定的に受け入れようとしていることを提示している。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入)

[Robert Frost] [男らしさ] [世紀転換期]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

今年度は Robert Frost と男性性の問題について、主に第三詩集 *Mountain Interval* と第四詩集 *New Hampshire* を中心に研究した。まず 1916 年出版の *Mountain Interval* については、“Boy” “Big Boy” “Man” という 3 つの言葉を軸に作品を考察し、ニューイングランドにおける農村労働にまつわる「男らしさ」の言説を明らかにしている。

Frost とジェンダーの問題について、Katherine Kearns は男性が真の男性性を獲得しようとする際に現れる男性性と女性性の葛藤を Frost 作品に見いだしている。その葛藤とは女性性があらゆる無秩序や混乱を内面化しコントロールすることであり、それは少年が母親の支配を逃れて大人の男になっていくことでもあると言う。だが社会学者 George Mosse の研究によると、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけては、男らしさの中心的な意味が、節度を保ち感情を抑制すること、つまり自己の中の女性的な部分をコントロールすることから、肉体的なたくましさや行動的であることへと変化していった時代でもあった。

このような時代背景を考慮に入れると、「少年」や「大人」というのは単なる人物表象にとどまらない、男性が「男らしさ」を獲得し「大人の男」へと成長できているかどうかを表す言葉として考えられ、「大きな少年」という言葉は、大人になりきれしていない半人前の男性というニュアンスを含むことが大きな意味を持つことになる。Frost は *Mountain Interval* に収められた 2 作品 “‘Out, Out-’” と “In the Home Stretch” の中で、この 3 つの言葉を使い分けながら、男性の成長を描いている。“‘Out, Out-’” で描かれるのは、製材所での作業中の事故により死亡した少年である。語り手は少年について、「大人」と同じ仕事をするが、「心」は「仕事が早く終わったときに大喜びする」ような「子ども」だと説明する。事故は少年の姉が食事のために少年を呼んだ瞬間、つまり、仕事が早く終わるかもしれないと少年が考えた瞬間のことである。このことから、事故は少年の「子ども」の心によって引き起こされたものであり、「大人」と同じ仕事をしながら精神面で「大人の男」になりきれしていない少年に対する罰であると考えられる。また少年の死後、周囲の人間が淡々と日常生活に戻る様子は、少年が受けた罰について社会が消極的ではあれ肯定していることのあらわれとも考えられるだろう。だが語り手の姿勢を考慮すると、Frost 自身は「男らしさ」の欠如した少年に対して同情的であると考えられる。

次に “In the Home Stretch” という作品で描かれるのは、都会から農村へと引っ越して来た Joe 夫妻と、都会に暮らす若者たちの間のやりとりである。Joe は若者たちを「大きな少年」と呼び、「農場で働いて、良い農夫になるべきだ」と言う。このような Joe の言葉の背景には、Michael Kimmel が指摘した、都市は男らしさを減少させる場所であり、反対に農村が失われた男らしさを回復してくれるという当時の認識があっただろう。しかし若者たちはむしろ Joe を馬鹿にするだけで取り合おうとしない。このような若者の態度には、Maria Farland が指摘する、当時の農村をめぐるもう一つのイメージが関係するだろう。すなわち都市に対して農村は経済的に衰退した、科学技術の恩恵を受けない退化した場所であり、その住人は劣った存在であるという、当時の社会学が描き出したイメージである。実際、この時代の農村は人口流出が進み経済的にも困窮していた。都会に暮らす若者たちにとって、農村暮らしは決して憧れるようなものではなかったのである。また農村が「闇」と結びつけられる一方で、若者たちが帰っていく都市が「光」と結びつけられて言及されること、さらに若者たちの「力強さ」が繰り返し言及されることによって、都市と農村の対比だけでなく、都市こそが力強い「男らしさ」と結びつけられていることがわかる。若者たちは農村での生活を忌避するが、Joe 夫妻は作品の最後でその自然の美しさを喜ばしいものとする。農村は男らしさを与えてくれる場所ではないが、それでも Frost 自身はその環境を肯定的に受け入れていたようである。

“‘Out, Out-’” では精神的な成熟が、“In the Home Stretch” では力強さが「男らしさ」として描かれている。そしてどちらの作品においても、周囲の人々や社会は「男らしさ」の欠如を否定的に評価するが、詩人自身は共感し、そのような生き方がある程度肯定しているようである。他にも “Putting in the Seed” では、男性的な理性ではなく、情熱に身を委ねて行動することを語り手は賛美している。「男らしさ」が欠如した状態を擁護するというよりも、むしろ積極的に肯定しているのである。

New Hampshire (1923) についてはダーウィニズムを軸として結婚と女性の表象に注目することで、女性の解放が男性に与える影響を詩人がどのように描いているかを考察した。Kimmel は世紀転換期にアメリカが迎えた男性性の危機について、その原因に資本主義化、産業化、核家族化と並べて女性の社会進出や女性解放運動を挙げている。そして女性解放運動に影響を与えたものの一つに、自然界においては子孫を残す際に雌が雄を選ぶという性淘汰の考えを提示した Darwin の進化論が挙げられる。ここで提示された「女性の選択の力」は、女性に男性からの自立を促すとともに、女性に対する支配力が薄れるとして男性に危機感を抱かせた。そして *New Hampshire* が出版された 1920 年代は、反進化論法の成立やそれに反発したスコープス裁判などにおいて、進化論が活発に議論された時期でもあった。Darwin は性淘汰を人間に応用しているが、この詩集では「女性の選択の力」が妻による不倫という形で繰り返し現れている。そこで 夫婦関係が描かれた “Paul’s Wife” “The Witch of Coös” “The Pauper Witch of Grafton” “Maple” の 4 作品を中心に考察した。

研究成果の概要 つづき

まず“Paul’s Wife”については、Ida Turney による原作との違いを比較することによって、Frost が、聖書の言説から外れた女性像を描きながら意図的に Paul の「男らしさ」を減じたことを明らかにした。Frost は Turney が描いた女性像に加え、「蛇」というイメージを用いて女性とキリスト教言説を結びつけて提示する。一方で、女性の方が「光を作り出し」、男性がその「影」となった様子を描くことによって、本来神である男性のものであった能力を女性が所有することになり、男女関係の聖書の言説が転覆されている。また Frost は、Turney が描いた慎ましやかな女性像も崩壊させており、従来とは逆の主體的な女性像や、「男らしくない」男性像を描き出している。さらに Frost は男性が「妻を所有する」という従来の結婚観を「恐ろしい」と表現しており、新しい男女関係を肯定的に考えていることがわかる。

“The Witch of Coös”は“*The Pauper Witch of Grafton*”と合わせて一組の作品として収められている。両方ともニューイングランドの地名がタイトルに使われており、ニューイングランドの魔女として描かれているのだが、その描写は大きく異なっている。まず“*The Witch of Coös*”では、女性の不倫とその罪の意識が描かれている。夫はすでに亡くなっているのだが、彼女の家は未だに夫という法に支配されており、妻は罪の意識から逃れることができない。その結果女性は狂気に陥っており、その様子が「魔女」として描かれているのである。一方で“*The Pauper Witch of Grafton*”では、「魔女」として振る舞う女性の様子が描かれている。この「魔女」は男性や社会に反発し性に主體的な様子を見せるのだが、Coös の魔女とは違って、その夫との生活は幸せなものとして描かれている。この「魔女」の主体性と夫の受動性は「家から可能な限り遠く離れた場所」であり、「木が低く、苔が高く生える場所」ではっきりとあらわれる。従来の父権的な法に縛られた「家」から離れることによって、女性が主体性を発揮するという描写は、Coös の女性が「家」から出られずに狂気に陥っている様子と対照的である。ただし作品最後において、Grafton の「魔女」の主体性は夫が生きている間しか存在しなかったことが明らかになる。従って「魔女」の主体性とは、夫が受け入れることによって初めて存在できるものとして描かれているのである。また Frost は“*The Witch of Coös*”の他にも、“*The Fear*”では不倫した女性の精神的不安定を描き、“*The Middletown Murder*”では女性の不倫に対する戒めを綴っている。Frost 自身が「夫が嫉妬深く自分のことを見張っているように思えたなら、それは夫が、自分の子どもが自分の名前や財産を継ぐのに相応しいか、その血は純粋かをたしかめたいからだ」とノートに残していることから、女性の不倫と不義の子の存在に対する Frost の懸念が明らかになるだろう。性淘汰の考えと女性の選択の力は、Frost にとって、妻が自分以外の相手を選んでいるのではないか、自分の子だと思っていたのが実は別の男の子なのではないか、という恐怖を喚起するものでもあった。だが一方で、Frost は“*The Pauper Witch of Grafton*”の中で、男性にも豊かさをもたらすものとして女性の主体性を描いている。女性の選択の力を恐れる保守性と同時に、夫婦という関係性の内部においては女性の解放や主体性を肯定する先取性が Frost には見られるのである。

“Maple”という作品では、Maple と名付けられた少女が女性としてどのように生きるべきかを探求する様子が描かれている。その過程で少女が聖書の中の言葉に注目することから、これまでの研究では、聖書における不倫した女性に対する罰や良き母親のイメージに少女が関心を持っていると考えられてきた。しかしこれらの論では、少女自身の、聖書の中には「何もなかった」という言葉が考慮されていない。つまり聖書が女性に押し付ける、従順な母親像とそこから逸脱し罰せられる女性像の両方を、むしろ少女は拒絶しているのである。Maple は自分の意志において教育を受け、職業に就き、結婚相手を選択するだけでなく、母親としての役割よりも女性としての官能性を重視する姿勢を見せており、これは少女の夫となる男性も是認している。これまでは「速記」を職業として選んだことから少女の受動性が主に指摘されて来たが、家庭に閉じこめられ家事労働に縛られている他の Frost 作品の女性たちに比べれば、はるかに主体的に行動する女性だと言えるだろう。Maple のように「意味のある名前よりも意味の無い名前の方が良い」という語り手の言葉は、このような Maple のキャラクターの肯定に留保をつけるものではある。しかし、主体性を獲得した女性を魔女へと追いやるのではなく一人の人間の女性として認めたことは、この時代の男性にとっては最大限の、解放された女性に対する肯定だと考えられる。

Mountain Interval では男らしさの獲得に失敗した男性に対する、詩人の共感を読み取ることができる。そして *New Hampshire* を男性と女性の関係性から読み解いたとき、男性性の欠如は女性の解放によって引き起こされるのだが、Frost はそのような状況を拒絶することなく、自らの恐怖に自覚的でありながら「新しい女性」を肯定することによってその進取性を提示しているのである。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④ 学会発表

- ・ アメリカ文学会東京支部例会 2014年5月17日 (慶應大学)
「Robert Frost と男らしさのゆらぎ――*Mountain Interval* に描かれた少年、大きな少年、大人の男」
- ・ 2014年度 立教英米文学会 2014年12月20日 (立教大学)
「Robert Frost における男らしさと女性たち――*New Hampshire* を中心に」